

# 六花



2010

平成22年

俳句雑誌りっか

Cover designed by Little Bird

7月号

ぎ 義理堅き人の返杯螢宿  
を をみな声橋の下から螢狩  
ん 雲上に月あり螢乱れ飛び  
し 塩利きし水は甘いぞ螢来い  
や 屋根越えて藪へ入りたる螢かな  
う 薄雲の暮れ残りをり螢沢  
じ 地滑りに傾く藪や螢闇  
や 焼き印の消えさうな下駄螢狩  
の 野面なる城の石垣雨螢  
か 風の夜は木陰離れぬ螢かな

ね 寝落ちぬる山の温宿や姫螢  
の 軒先に吊して寝む螢籠  
こ 濃き闇となりけり螢点りそみ  
糸 枝あらば枝を飾れる螢かな  
し 静寂なる竹よりこぼれくる螢  
よ 夜の更けて数弱りたる螢かな  
ぎ ぎりぎりに欄干の手を螢へと  
や 山風の急に止みたる螢川  
う 裏山は生野銀山螢の火  
む 無住寺を開きし尼の螢籠

せつかしやう  
雪華抄

青田

ことり

ぎ 銀髪を高く結ひ上げ夏羽織  
を 沖遙か渡れる鳥に雲の峰  
ん んくばかり言うては冷酒舐めてをり  
し したたかに酔うて水中花に戯るる  
や やんはりと掬ふ夜店のひよこかな  
う 浮雲や青田のにほふ東雲に  
じ 磁器を選む風鈴の鳴る店先に  
や 薬罐もて魚を追ひたる水遊  
の 糊を溶く刷毛の先にも梅雨湿  
か 掻き鳴らす音の如くに螢かな

ね 寝苦しき胸に香水垂らしけり

の のんびりと新茶に過ごす夕べかな

こ 込み上げて今一斉に螢かな

糸 炎昼の縁えんに投げ出す脚青し

し しみじみと匂うてきたる蚊遣香

よ 夜涼みの脚あまやかに崩したる

ぎ 祇王図の涼しき色を眺めをり

や 宿浴衣湯を出し肌に馴染まざる

う 萍の間にひらりと魚の影

む むきながら豌豆を選び分けてをり

# 落椿しばし花瓶の横に置く 筒井八重子

ゆきやなぎ光りて風のそよぎけり

やまぶきの鮮やかに日に映えみたる

ふつくらと色増す蓄八重桜

八重椿潜れば薫り満ちみたる

おちつばきしばしかびんのよこにおく つついやえこ

生け花にと椿を剪ったが、そのときに落椿も拾ってきた。枝の椿を生けて見たものの、落椿にも心が移るので、花瓶の横に置いた。置いてみると捨て難い風情と何かを語りかけてくるようで、しばらく正座して見入っているのである。活けられた所を舞台に例えたら花瓶の椿よりも脇役の落椿の方が主役を凌(しの)いでいるのである。見詰めながら落椿からあれこれと思いを巡らせ、静謐なひとときを味わっているのだ。一見地味な作品のようにあるが、落椿を硝子や陶器の水に浮かべたとかいうのではなく「花瓶の横に」置いたという意外性を評価したい。

雪 卿 集

ともしび

梶浦玲良子

しがみつく村へ雪解の川曲る  
夕星や帰りを急ぐつくしんぼ  
とびとびの谷のともしび獺期果つ  
料峭の山のひとつが歩きだす  
墨染めの風の行方や糸柳

花の間

笹村政子

ひとひらの花にゆるびし掌  
雨粒のまじり初めたる花吹雪  
花びらの透きとほるまで風に乗る  
花の闇くぐりて女将現るる  
もう一度子燕の口数へをり

せつじゆしゆう  
雪樹集

雛流し

久永つう

小鳥来るか細き脚で大地蹴り  
雛流し目を合はせ合ふこともなく  
生命ある者へと泳ぐ鯉のぼり  
松の芯真直ぐに天を突きぬたる  
桜葉吹かれては又落ちにけり

七変化

松下幸恵

親に似し子に育ちゆく七変化  
部屋中にあぢさゐの鞠壇飾り  
絹の雨新色あぢさゐ珍しき  
こんな色あつたのですか額の花  
一列におだま西瓜の並べあり

# 蛍雪譚 六甲

とびとびの谷のともしび 獵期果つ

梶浦玲良子

山峡の家々に灯が点いた。とびとびにしかない家の少なさが反つて谷あいの灯を明るく強く感じさせる。冬の狩猟期も終わった一抹の寂しさはあるが、豊かだった獲物感謝しているように、また春を迎える喜びのように明るく賑やかな灯なのである。深く静かに味わいたい作品。

花びらの透きとほるまで風に乗る

笹村 政子

散った桜の花びらがぐんぐん風に乗って飛ぶ。花びらに意志があつて「自らが透き通るまで風に乗ってゆくのだ」と感じ取った感覚的な擬人化の作品。同時作品の「もう一度子燕の口を数へをり」も、口を拡げて餌を貰う子燕の動きの速さに数がかめなかったことをさらりと詠んでいる。

さざ波の中に水草の生ひきたる

松本文一郎

水が温み草が生えてくるのを促すように春風が吹く。春風に立つさざ波は水草の頭(芽)を撫で、子育てをしているかのようで優しさの充ちた作品。事實は「さざ波の立つ水の中に」だが、俳句的に省略して「さざ波の中に」という表現をした。また「春禽や鶏小屋の錠固く」も自由な囀り飛び交う春の鳥と小屋に閉じ込められた鶏の対比を即物的に詠んでいる。(以下略)

# 六花集 会員作品

伊吹山仰げる墓地のつくしんぼ

平 届 滯 子

落花受け水面生き生きしてをりぬ

風車やうやく風をとらへたる

花吹雪後姿の夫に似て

あやとりの指の迷ひや春の昼

菊 谷 潔

入相の後の永さや春の暮

朝空に鳥の声満ち春の風

雨音や花はさかりを過ぎたれば

炭斗すみに花びらまじる炉いれのなごり

吹く風に春惜しみつつ袖払ふ